

國學院大學學術情報リポジトリ

昔話「肉付き面」の伝承と蓮如信仰

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西座, 理恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001477

昔話「肉付き面」の伝承と蓮如信仰

西 座 理 恵

論 文 要 旨

「嫁威し肉付き面」の説話は、真宗寺院の縁起や書物だけではなく、昔話としても伝承されている。説話と昔話の違いは、説話では信仰を妨げる者が罰を受け、その救済者が蓮如上人であるのに対し、昔話では、姑が嫁の寺参りを妨げるために仕事を命じたり、嫁が姑の顔についた面を外したりする点にある。

「肉付き面」の昔話を主に、「寺参り型」、「蓮如救済型A、B」、「寺参り嫁いじめ型」、「嫁いじめ」型というように話型に分類し、蓮如上人の影響が大きい地域、浄土真宗の影響を受ける地

域、影響の少ない地域において、どのような分布をするかを調べた。その結果、蓮如上人の影響が少ない地域では、蓮如上人の功德や信仰の重要性を説く話よりも、姑の嫁いじめを戒める話が多く見られ、昔話「肉付き面」の背景に嫁いじめの昔話の存在があると推測した。

〈五つのキーワード〉

- 1、肉付き面
- 2、蓮如上人
- 3、話型
- 4、地域
- 5、姑の嫁いじめ

一、はじめに

嫁威しの肉付き面の話は、吉崎御坊願慶寺の縁起『嫁威肉附面略縁起』、蓮如上人ゆかりの地として紹介される『二十四輩順拝図会』（以後『二十四輩』と省略）の「嫁おとし谷の由来」など、浄土真宗の教化譚として知られている。縁起としては、他にも吉崎西念寺（吉崎寺）、福井県の浄林寺に伝わるものがあり、伝説としては『越前古跡拾集記』に記される^{（注）}。話は二系統に分かれて、系統（一）は『二十四

輩」、山科西宗寺『嫁威谷物語』、西念寺『嫁威肉附之面由来』などの話で、夫婦が吉崎参りに熱心で、老母が吉崎から帰る嫁を脅かす。系統(二)は願慶寺、浄林寺の話で、登場人物は夫と子供を亡くした嫁と姑で、姑は嫁が吉崎へ行く途中の道で脅かす。^(注2)嫁に夫がいるかないかの違いであるが、いずれも姑が寺参りへいく嫁を鬼面を被って脅し、面が顔から外れなくなつて、蓮如上人の教化によつて救われることになる。寺の縁起としての、「嫁威し肉附き面」の話は、寺に伝わる寺宝や、名所の由来、あるいは寺と蓮如とのつながりを語ることが目的である。

「嫁威し肉附き面」の話は、昔話でも伝わっており、先にあげた寺の縁起類や伝説の話と大筋において差はみられず、姑が嫁の寺参りをやめさせるために嫁の帰路に隠れていて、鬼の面で脅し、面は姑の顔から外れなくなる。ただ昔話では、外れなくなつた面を外す人は必ずしも蓮如上人とは限らない。また昔話では、姑が嫁を寺参りへ行かせないために、嫁がする仕事を日々増やすが、嫁はその仕事をやりとげて、寺参りへと行くというように、姑の嫁いじめと嫁の仕事量の増加について語る話が見られる。昔話が語る内容は、嫁と姑の関係性を含め、寺院縁起や伝説よりも多彩である。

「肉附き面」説話の先行研究について、

(1) 美濃部重克は「室町物語の挿絵小考」^(注3)において『いそざき』は「室町文芸の諸作品の中にあつてこの物語を特徴づけるのは、肉付面のモチーフを物語の中心に据えている所である。肉付面のモチーフは現在では姑の嫁いじめの昔話として流布していて、ことに北陸の浄土真宗地帯では吉崎御坊における嫁おどしの伝説として知られている。古いものでは、たとえば、赤木本の『酒典童子(伊吹山)』の中に叡山の児学生であつた酒呑童子が風流踊りに被つた鬼の面が離れなくなつて鬼に変身していくといった例もある。」と指摘する。

(2) 沢井耐三もまた「お伽草子『磯崎』考」^(注3)において「美濃部重克氏も指摘された『伊吹山酒典童子』の物語において寺の稚児たる酒典童子が祭の風流に着けた鬼面が取れなくなつて、そのまま鬼に変身していくような趣向も作用しているのかもしれない」と述べている。

(3) 徳江元正は『磯崎』と『伊吹山酒典童子』の共通点として「双方とも、稚児が出てくる。立場こそ違うものの、これらの仏教説

話や芸能の伝承や管理に携っていた人々を推測してみる手がかりとはなろう。(略) この奇怪な説話の背景には、今日も見ることが出来るやすい祭りのごとき鬼形による芸能が先行しているのであろう。」と指摘する。^(注4)

(4) 南方熊楠は「磯崎について」において、「七人比丘尼」、大和当麻寺、丹後与謝郡の国分寺所蔵の肉付き面、下総の匝瑳郡南条村大字虫生の土地の伝説、信州白馬山麓の桜草の由来に関する伝説に肉付き面のモチーフがあると指摘している。^(注5)

(5) 近世文学の研究者、延広真治は「江戸文学の多様性―「肉付きの面」を通してみる―」(『帝京大学文学部紀要 日本文化学』(41)、二〇一〇・三)において、肉付き面のモチーフをとりいれた近世期の浮世草子から浄瑠璃、歌舞伎、川柳に至るまで様々な作品を紹介しており、肉付き面のモチーフを取り入れた作品のデータベースとして有意義である。

(6) 徳田和夫は野村純一編『昔話・伝説必携』(別冊國文学41、H3)において「蓮如上人」において「肉付き面」の昔話に関して次のように述べる。

お伽草子『磯崎』にも肉付面の趣向があり、決して浄土真宗だけの唱導説話ではなかった。室町時代の嫉妬説話や嫁いびりの話の中にすでにこうした趣向をもつものが多くあつて、それを『磯崎』が取りこんだのだろう。寺院側もそうした普遍的な説話を利用して教化しようとしたのである。(略)

各地の肉付面伝説が蓮如上人のエピソードして語られてきたのかどうか検討してみたい。真宗の唱導活動にかかわる伝説と、無縁のそれとがあるであろう。(『昔話・伝説必携』一〇七頁)

この徳田の指摘を参考に、本稿では最初に「肉付き面」の昔話の伝承と「蓮如上人絵伝」及び、「蓮如忌」との関係について述べる。次に全国の「肉付き面」の昔話を表にして、昔話を地域別、話型別に分け、地域ごとの話の特徴と分布について考える。また、昔話が多く伝わっている場所と、あまり伝わっていない場所とでは話の内容に差がみられることを指摘する。それらを踏まえて、蓮如上人と関係しない「肉付き面」の昔話にみられる特徴を捉えたい。本稿では「おどし」の漢字表記について、吉崎御坊願慶寺の縁起の題名に

「威」が使われているため、縁起や説話に係る場合は「威」の字を用いるが、人をおどすという行為を示す場合は「脅」の字を用いて、その使い分けをする。

二、昔話「肉付き面」の伝承と蓮如上人

昔話の報告資料をもとに作成した表Aには、原典資料を参照できずに載せなかったが、『日本昔話通観^(註)』によると、青森、和歌山、熊本、長崎県においても「嫁威し肉付き面」の昔話の伝承を確認できる。ところで、表Aにおいて事例が多いのは、新潟、石川、愛知、岐阜、広島県である。福井県は表に二例しか載せられなかったが、『伝承文芸9 奥越地方昔話集』（昭47・6、國學院大學民俗文学研究会編）では大野市3例、勝山市13例、大野郡3例、足羽郡13例、今立郡3例というように「嫁威し肉付き面」の採集記録が多い。吉崎を拠点とした蓮如の布教活動後、北陸において増加した真宗信者は、同派の信者を「門徒衆」と呼び、他宗との差異化を示す。野村純一は「奥越の昔話」（『伝承文芸9』）の解説において、杉原丈夫『越前若狭の伝説』をとりあげ、次のように指摘する。

県下には昔話と伝説との癒着状態がひととき著しい。そしてひとたびは、そのような姿で表出される伝承の因由には、おそらくは真宗王国としての揺ぎない伝承基盤が存在しているのに違いあるまい。といったような面も指摘されるようになってきた。

また、表Aに三例しか挙げられなかった富山県に関しても、『伝承文芸 15』（富山県東礪波郡昔話集、昭63・8）では、昭和五十五年八月二日からの一週間で笑話に分類される「肉付面」が16話、伝説の「吉崎の肉付面」と合わせて35話採取されたことが記されており、ここでも浄土真宗の影響の大きさについて次のように指摘される。

富山県は口承文芸採訪の難しいと言われる中で、採訪において実感したことがある。それは仏教（浄土真宗）の影響である。そ

れは口承文芸全体に網羅され、この地域に対する本研究会会員の予想を上回るように思われた。また、各町各村には数多く寺院があり、日によつては寺ごとの講などで、限られた地域の人たちが一同に寺に集まり、採訪にあたつて苦労したこともあった。各家には必ずといっていいほど立派な仏壇が収められ、人々にとつて仏教が生活の中に生き、それはまた重要な位置を占めているように感じた。

姑が、信心深い嫁の寺参りを妨げるために面を被つて脅して、外れなくなった面を外してもらう話は、「蓮如上人絵伝」的一幕にもある。現在、私の手元には、吉崎御坊願慶寺の「蓮如上人御遺徳絵伝」と台本「蓮如上人御一代記伝」（願慶寺蔵版、大正13年発行）がある。絵伝の「嫁威しの鬼面」の段には、竹藪の前で鎌をもち、白髪を乱し、面で嫁を脅す姑と、提灯を手にする嫁とが描かれている。台本は三十六段に分かれ、絵は一段二話で、十一段二十二話となっている。二〇一七年に、福井県あわら市の吉崎御坊願慶寺で伺った話によると、昨今また吉崎御坊跡にて本向坊の「腹籠の聖典」の段が絵解きされているそうである。「蓮如上人絵伝」については、蒲池勢至「蓮如伝承の生成と門徒の信仰」^(注7)による詳細な分析があり、絵伝が制作された目的について次のように述べている。

蓮如上人絵伝は、三月下旬から四月上旬に行われる蓮如忌に、報恩講における親鸞の絵伝と同じように内陣余間などに奉懸され、その前で、『御伝抄』を真似た『蓮如上人絵伝』や各種縁起が拝読されていた。そして近世の蓮如伝記や説教本を参考にして絵解きも行われていた。（注7、三〇九頁）

このように蓮如上人絵伝は「蓮如忌」という仏教儀礼において、信者たちが共に蓮如を偲ぶために用いられた絵伝であった。この絵伝は一四四点の所在が確認できており、所在地域に遍在性があると指摘される。

絵伝は、北は北海道から南は鹿児島まで所在するが、一見して明らかなように所在地域に遍在性が認められる。すなわち、愛知

県が三六点と一番多く、石川県が二一点、福井県が一四点、滋賀県が一三点と続く。この四県以外はそれぞれ一〇点未満にしか過ぎない。県単位別でなくもう少し広い地域で捉えてみると、愛知・岐阜・三重で四五点、福井・石川・富山・新潟で五〇点となり、全体の約六五パーセントが東海地方と北陸地方に集中しているといえよう。(注7、三二一頁)

蒲池氏は「絵伝」について、調査は不足しており、今後も発見される可能性が高いと述べている。分布については必ずしも正確とはいえないが、東海地方や北陸地方に絵伝が集中している傾向は指摘できる。三河地方に三〇点も集中するのは、応仁年間における蓮如の三河教化という伝承を有する寺院が多く、現在は廃れたが、西尾・岡崎・碧南・刈谷などの寺々で蓮如忌の催行が盛んであったことと関係する。これは、蓮如の吉崎御坊の建立と教化に関わる伝承を多く伝える北陸にも同様のことがいえるという。(注7、三二一―三二三頁参照)

確かに、筆者による「肉附き面」の昔話の分布にも偏りがある。蒲池氏の論考によると、「蓮如上人絵伝」は蓮如忌の催行が盛んな地域に多く分布する傾向にあるようだが、「肉附き面」の昔話も蓮如忌が盛んとされる地域で、多く採集されている。特に愛知県の伝承は、表A99話のうち13話も占めている。蓮如忌における「絵伝」の絵解き、説教、法話が話の伝承に影響を与えたと考えられる。

ところで、昔話の内容には地域的な特徴がある。『伝承文芸15』(富山県)において、「嫁威し肉附き面」の昔話と蓮如伝説が分けられていた。昔話で姑の救済が蓮如上人によるものの他に、お坊さん、和尚さん、神官のような宗教者によるものがある。また宗教関係者以外の救済者として、嫁もあげられる。昔話の目的は、必ずしも信仰を奨励する単純なものではない。面を外す救済者が和尚、僧侶でありながら、説いているのは嫁いじめへの戒めという話もある。そこで、「肉附き面」の昔話を、蓮如上人、吉崎と関係の深い地域、浄土真宗の信仰者の多い地域、それ以外の地域との三つにグループ分けし、それぞれの話の違いに注目していきたい。

三、昔話「肉附き面」の話型と傾向

①話型の特徴

蓮如忌の催行が盛んで、「蓮如上人絵伝」が多く伝わる新潟、富山、石川、福井、愛知、岐阜県をⅠグループとし、蓮如忌の催行が盛んではないが、浄土真宗の信者の多い大阪、滋賀、広島、島根、香川県をⅡグループに、その他をⅢグループにわけて、昔話の内容を検討してみる。^(注8)その際、昔話の内容を七つの話型に分類し、それぞれの地域にどの話型が多くみられるかを探る。まず、標準的な内容をもつものを、ア「寺参り型」として、その梗概を記すと次のようになる。

- (1) 寺参りが好きな信心深い嫁と、寺参りが嫌いな姑がいる。
- (2) 姑は嫁の寺参りをやめさせるため、嫁が寺参りにいく往路あるいは復路で鬼面を被り脅かす。
- (3) 姑の顔から鬼面が外れなくなる。
- (4) 嫁は姑を寺へ連れて行くか、あるいは宗教者に頼んで祈祷してもらって、面を外す。(実例によっては、戒めだけで終わり(4)が省略される場合もある。)

このように、信仰の邪魔をする姑から鬼面が外れなくなるという、信仰の大切さを説く話を「寺参り型」とし、そのうち面が蓮如によって外れるもの、吉崎との関連を語るものをイ「蓮如救済型A」とする。この型の特徴は、嫁と姑が入れ替わり、寺参りの好きな姑がおり、それを憎む嫁が面を被って脅すという話になっても、信仰の大切さを説く内容は変わらない。嫁と姑が入れ替わる例として、表の例話Ⅱがみられる。

しかし、冒頭で寺参りが好きな嫁、嫌いな姑という前置き以外に、姑の嫁いじめとして、姑が嫁の寺参りを妨げるために仕事をさせたり、あるいはその仕事量を増やすという場合は、嫁と姑を入れ替えることはできない。「肉付き面」の昔話にみられる「夜なべ」を具体的に述べた、「いりこを挽く」、「米や雑穀を挽く」、「豆や粃などを石臼で挽く」などの仕事は主に嫁の仕事であった。^(注9)このように「嫁いじめ」の内容が話にみられる場合、嫁と姑を入れ替えることはできないが、寺参り、帰り道の脅し、外れない鬼面という要素は「寺

参り型」と共通するので、ウ「寺参り嫁いじめ型」とする。この話の型では、信仰の大切さを説くと同時に、「嫁いじめ」も戒めている。続いて、「嫁いじめ」が語られ、姑が蓮如上人や吉崎によって救われるものをエ「蓮如救済型B」とする。さらには、寺参りについて語らず、嫁を実家に帰すために里帰りをさせ、帰路に脅すというように、単なる嫁いじめの話をお「嫁いじめ型」とする。そして最後に由緒ある面を遊び半分や悪行を目的に使用し、とれなくなる話をカ「由緒面型」と分類し、それ以外をキ「姑（継子）いじめ型」とした。以上のア～キの七話型がグループ、I、II、IIIにおいてどのように展開しているかについて見ていきたい。

② 蓮如忌、絵伝の濃厚な地域

グループIの富山、石川、福井県は実例が似通っているためまとめて紹介する。25、27は「寺参り型」である。30は、嫁の仕事を含まないが、話の冒頭で「嫁いじめ」が語られるので「寺参り・嫁いじめ型」に分類した。富山県の17、18、19、石川県の21、22、23、24、26、28、福井県の29は「蓮如救済型B」である。また20、29の話に関しては、登場人物の名前、内容が『二十四輩』の内容と同じで、書承の影響も考慮しなければならない。

愛知県では、41、45にしか嫁いじめの話はなく、「寺参り型」に蓮如上人の影響がみられる話が多く、50のみ「由緒面型」である。「寺参り型」に属する話にも53のように、蓮如から宗祖の親鸞に代わり、浄土真宗色が濃くなっているものもある。また45の「嫁の寺参りを浮気と勘違いする」は、表全体では36、63、69、84、89にもみられるが、Iグループではこの一例である。「嫁の寺参りを浮気と勘違いする」というのは、姑が嫁の寺参りを強く忌避する理由として、嫁のモラル破綻を理由にあげていると考えられる。

新潟県の話は他の北陸三県や、愛知県に比べると、話型が豊富であり、8、9、10、16に「嫁いじめ型」がみられる。9の「東蒲原郡鹿瀬町」の嫁と姑が一緒に苧績を紡ぐ話を例にあげる。

(1) 嫁と姑が毎晩一緒に苧績を紡ぎ、嫁は先にその仕事を終えて、寺参りへむかう。

(2) 姑はそれが腹立たしく、どんどん苧績を紡ぐ量を増やすが、嫁は寺に参る。

(3) 嫁が寺から帰る時に姑が鬼面をかぶり脅かし、面がとれなくなる。

(4) 嫁が寺の和尚を呼びに行き、経を読んでもらい、面を外し、姑は改心する。

『日本の昔話16 美濃の昔話』(稲田浩二編、NHK出版、昭和五十二・四)では、姑が意地悪をして、寝ないで緒を續むので、嫁は姑より先に寝る。姑は嫁が寝てから「七こき半」できたといったが、嫁は節穴からみて「このこき半」という。また『日本昔話通観19』(一九七九・十、同朋社)でも、「夜なべくらべ」という昔話がある。姑が嫁を離縁したくて、夫婦を先に寝かせ、自分はいろり端で麦わらの緒を三つ仕上げ、朝おきて嫁の前へ投げ出す。翌日も同じことをする。嫁は戸の節穴の光で七つ編んだといって、前もって用意した緒をなげて、姑を降参させる。9では、嫁姑が夜なべの仕事で競い合う。夜なべの仕事をめぐって姑が嫁いじめをするモチーフと、寺参りの嫁を脅すモチーフとが一緒になって話が構成されている。

岐阜県の54と福井県の29と同じく『二十四輩』からの影響と思われる。岐阜県の全10話中4話が「蓮如救済型A」に分類される。59は、夫婦が姑についた面を千人に晒して外すというもので、他に例をみない。58は姑が息子夫婦の仲を妬み、鎌をもって嫁を殺しに行き、日蓮様に助けられる。姑が鎌で嫁を襲う話は静岡県の話にも見られるが、宗派が越境しているのは語り手レベルの問題なのか、確認が必要である。Iグループの話数は48話で、蓮如上人や吉崎と関連があるのは25話もあり、52%を占めており蓮如伝説の影響が強いといえる。

③ 浄土真宗の盛んな地域

IIグループの総数は27話であるが、滋賀、大阪、京都には一話ずつしかなく、この三話には蓮如、吉崎は登場しない。大阪の話は嫁いじめが中心で、嫁は姑からのいじめを苦にして寺参りをする。嫁を面で脅すのは、里帰りさせた帰路で、面が吉崎ではなく永平寺にあるというのもこの話にしか見られず、「寺参り」先が真宗、曹洞宗というように混雑している。

京都の実例では嫁は賢くて、信心深く、姑は意地が悪く、嫁は姑の心を治してもらおうと寺参りをする。姑は鬼面をかぶって嫁を脅

し面が外れなくなるが、嫁にお寺に連れていってもらい、祈祷によって面が外れ、姑は改心する。

広島県は17例あるが、蓮如や吉崎はどこにも出てこない。嫁に仕事をさせる話は、71、72、77、78と四例あり、78のように嫁が姑の面を外す話もある。広島県の話の特徴としては、寺参りの邪魔をして面が外れなくなるところで終了し、その後どうなったのか説明がない。面の伝わる場所が、74では常陸の国、76では西本願寺、79では信濃の善光寺、87では京都というようにさまざまである。蓮如上人の代わりに「法然上人」や「親鸞上人」などの高僧が、浄瑠璃の主人公「蓮華上人^(注10)」というのも見受けられる。浄土真宗、寺の説法の痕跡はみられるが、蓮如上人の影響は薄いようである。

島根県では五話のうち、89に吉崎が登場するが、地元で伝えられていたものではなく、話者が吉崎の別院で泊まった時に聞いた話という。90は嫁の仕事にはふれないが、姑が嫁いじめをやめるという約束で和尚さんが姑の面を外す。92は、嫁姑の仲を説く「仏壇の内敷のいわれ」として語られており、寺参りの話ではないので「嫁いじめ型」に分類した。

香川県の94は嫁に寺参りをさせないように毎晩仕事を言いつける「寺参り嫁いじめ型」である。

Ⅱのグループでは、話者が吉崎の別院で聞いたとする島根県の89の話以外に、吉崎、蓮如上人に関する話は見られず、広島県の話では蓮如上人や吉崎に代わって、法然、親鸞、蓮華上人といった高僧や、西本願寺、善光寺といった有名寺院が登場する。また大阪府の68、島根県の話92、のように「寺参り型」にあてはまらない「嫁いじめ型」の話もあり、Ⅰグループとは大きく傾向が違っている。

④ 蓮如上人、浄土真宗との関係の薄い地域

グループⅢの話を、秋田、岩手、宮城、山形、東京、神奈川、静岡、群馬、埼玉、長野、岡山、徳島、佐賀県の24の話を北から順に見ていくことにする。最初に、秋田、岩手、宮城、山形の話についてみると、山形県を除く、1、3、4、5は「寺参り嫁いじめ型」で、いずれも嫁が姑についた面を外すというように、嫁の力が強調される。また2、6は寺参りについて語らない「嫁いじめ型」の話である。そのうち2は、口をきいてくれない姑を苦にして、嫁が観音様に拝むのを見て、姑が観音様の後ろから鬼面で脅す。取れなくなった面は、嫁が観音様をお願いして外してもらう。6は、姑が嫁いじめのために、毎晩墓参りをさせ、墓場で鬼面を被り脅す。それに気づい

た住職が老婆を押さえつけ、むりやり鬼面を外す。この七例は、寺参りを邪魔して罰せられるというより、嫁いじめのために罰を受ける姑の姿が強調される。

東京の話も寺参りとは関係しない「嫁いじめ型」「継子いじめ型」「由緒面型」である。32は嫁が鬼の面を鎌で切り、姑が正体であることを見破る。神奈川県36は、姑が夜なべをさせるために、嫁の寺参りを浮気であるとする。

静岡県の37は、姑が阿弥陀信仰のためにお宮参りにいく嫁の邪魔をするために、姑が嫁を刀で切りつける。嫁は殺されたと思ったが、自分のかけていた布が切ただけで自分は傷を負わない。身代わりに阿弥陀様の肩が切れていた。外れなくなった姑の面は嫁が力づくで外す。この話に関して、野村敬子「女性のフォークロア（五）」^(注1)は、小正月の満月の夜に、納戸に寝ている嫁のところに、土足で姑が刃物を手にもって、「産すが産さねが」と叫び、嫁が「産しあんす」と返事をするという習俗をあげ、次のように解釈する。

『静岡県伝説昔話集』の「肉付きの面」事例はその顕著なものである。姑が刃物を持って嫁を威し、嫁は着物だけを切り取られて蘇生するとある。おそらく「嫁威し」の荒々しさは嫁の通過儀礼の正月行事の古層を見込むものであったに違いない。（注11、一八六頁）

「肉付き面」の昔話と、嫁と姑の民俗儀礼との関係についての興味深い指摘と言える。また姑が嫁を鎌で切る話には、明治十九年、大阪彦六座が初演の浄瑠璃『親鸞上人 蓮如上人 顕如上人 弥陀本願三信記』^(注12)がある。姑が吉崎から戻った嫁を鎌で切りつけ、殺害し、死骸を古池に投じる。しかし身体には斬られた後がなく、守り袋の名号が切れていて、嫁は蘇生する。昔話に『二十四輩』の設定の話が見られ、また広島県の84にも浄瑠璃の主人公「蓮華上人」が登場するので、芝居からの影響が考えられる。群馬県の話も「よくお芝居にある吉崎の嫁脅しってあるでしょう。」ではじまり、話者が直接芝居から知ったことを伺わせる。

埼玉県の話は寺参りの話ではなく、嫁を寝させないように一晚中米や麦を臼で挽かせる。嫁を夜にお使いに行かせて、鬼の面で脅し、姑の面は外れなくなる。「嫁いじめ」に特化した話である。

岡山県の話には、寺参りが出てこない。嫁がトイレにいくのを陰に隠れて脅かすことを繰り返し、その姑の顔から面が外れなくなり、お寺のお坊さんに外してもらおうというもので「嫁いじめ」が中心となる。徳島県の話は「寺参り・嫁いじめ型」で、京都の話と同じく、嫁が姑の心根を治してほしいと寺参りをする。最後に「嫁いじめ」はいけないと諭す言葉があり、信仰よりも「嫁いじめ」の戒めに心が置かれている。

佐賀県の96、97、98は「寺参り型」であるが、98では姑の面を外すのは親鸞上人で、広島のように蓮如以外の高僧が登場する。99は嫁に木綿を引かせる仕事をさせるところから「寺参り・嫁いじめ型」で、面が三井寺に安置されているというのは、他に例がない。Ⅲグループを話型別に分けて見ると、芝居で知ったという話を除いて、浄土真宗と関係がある話は佐賀県の98、99だけであり、「嫁いじめ」を戒める話が圧倒的に多い。

三、昔話「肉付き面」の社会的背景

I、II、Ⅲのグループの結果を表Bにあらわした。比較してわかるのは、Iグループの話のほとんどを占める「蓮如救済型B」が、II、Ⅲのグループでは見られないことである（Ⅲのグループの一例は芝居によるもの）。IIグループでは「寺参り・嫁いじめ型」の割合がIより増え、さらに寺参りをとらない「嫁いじめ型」の話が見られるようになる。Ⅲグループになると「寺参り型」が少なくなり、「嫁いじめ型」の話の割合がさらに増え、例話のほとんどが「寺参り・嫁いじめ型」となる。つまり、I～Ⅲへと地域が変わるごとに、蓮如・吉崎、寺参りの功德を語る話が減り、嫁いじめを戒める話が増える。

「蓮如上人絵伝」が多数残され、「蓮如忌」が盛んな地域には、寺参りと信仰を中心に説く話が多く、その影響が少なくなるにしたがって、「肉付き面」の昔話は「嫁いじめ」を戒める傾向になる。姑が嫁の寺参りを嫌う理由として、僧侶との浮気が語られるのは、蓮如上人の影響が少ない地域では多い地域に比べて、信仰に対する思いが薄れるため、嫁が寺に参る理由をほかに見出そうとするからではないだろうか。

嫁が一日の仕事を終えてから、毎夜一人で、寺に参る、説法を聞きに行くことは現実的ではない。「肉付き面」の寺参り型の昔話は、「食らわば食らえ」のような決まり文句や、宗教関係者による救済が語られる面からみても、説法による伝播の可能性が高い。信仰を妨げる者が罰を受け、蓮如上人に助けられる話は、蓮如上人と関係の深い地域にとっては、違和感がないかもしれない。しかし、一方で蓮如上人や浄土真宗になじみのない地域の人々には、嫁いじめの話の方が、現実における一般的な日常を反映しており、理解しやすかったと思われる。面のある場所が吉崎以外の場所であったり、岐阜県の56において嫁を救済するのが日蓮であったり、大阪の話で面が永平寺にあったりするのは、信仰を妨げる者が罰せられるのと同時に、「嫁いじめ」を戒める説法として、浄土真宗以外の寺でも語られたためではないだろうか。

蓮如上人や吉崎に関する伝説、浄土真宗に影響されないⅢグループには、秋田県の2、宮城県の6、埼玉県の例、大阪府の例、岡山の67のような「嫁いじめ」に特化した話や、姑の心を治してほしいと神仏に祈る嫁の話がある。先に、新潟県の嫁と姑が一緒に芋績を績む話を例に挙げたが、『美濃の昔話』にもあったように、昔話では、姑がたびたび嫁を実家に戻そうといじめ、競う話がある。表A3では、姑が嫁に「寺参りに行く日があらば、ザルで水くめ、裸でバラしよえ」というが、『伝承文芸 9』には「嫁と姑の歌問答」として次のような語りがあ

姑おばさんに「何しよ」と聞いたら

「石で袴を縫え」と言た。

そしたら嫁さんが

石で袴を縫えるなら縫うが

天に散る雲糸にとれ

と返歌をした。そしたらまた姑おばさんが

天に散る雲糸にはとるが

前の小川を糠で塞げ

と。そこでもう嫁さんは返歌しなかったわけだね。それやから、後に入った者は姑さんの言うことは聞かんけあいかなんと言うことね。いつまでも楯ついてんじゃないということやね。^(注13)

また和歌山県の話「嫁と姑の山くらべ」(『日本昔話通観 15』(同朋社、三六五頁)では、お役人が姑と嫁に山を作ってみろという。嫁は姑に勝っても悪いし、負けても自分の恥になるので、姑と同じ高さになるように調節する。姑が嫁の山を見ると、自分と同じ高さになっているので大変気に食わず、食べかけていた汁を嫁の盛りへひっかける。すると嫁の盛りが低くなって負けたという内容である。姑の理不尽な言いつけにも背いてはならない、姑への気遣いを怠ってはならない、忍耐が必要な嫁の境遇を表現している。

『静岡県伝説昔話集』^(注14)にも「けちな姑」という題の話がある。

- (1) 吝嗇な姑が汁にいれる味噌を嫁には出させず、小屋から自分で出して与えていた。
- (2) 姑は善光寺参りにでかける時、嫁に味噌を出すのを忘れ、気に病んでいた。
- (3) 嫁も迷ったが、夫が出しなさいというので、小屋へ出しに行った。ところが樽には大きな蛇が居座っていて、夫がその蛇を投げた。
- (4) 次の日、帰ってきた姑の顔に新しい傷がついていた。(注14、四七六―四七七頁)

この話で、姑は吝嗇であるとされているが、主婦権が姑にある場合、食べ物貯蔵を管理するのは姑であり、嫁が蔵に出入りするとはできなかったという。^(注15)

また多くの「肉付き面」の昔話が採集された広島県八千代町に隣接した千代田町では姑が嫁をいびることを「ホボロをウル」といったそうで、いびりに我慢ができなくなると、嫁は夜暗い中、実家へ逃げ帰る。^(注16)

姑がいびるとか、夫婦間にいざこざがあったりして辛抱出来難い時、夜に黙って婚家を抜け出し、夜の恐ろしさもいとわず里へ帰るのである。(注16、一七六―一七七頁)

このような関係を背景に嫁と姑の昔話は生まれ、それが蓮如上人と関係の深い地域Ⅰのグループにおいて「蓮如伝説」と結び付き、「嫁威し肉附き面」の話になった可能性は考えられる。浄土真宗の寺院が多くても蓮如上人にゆかりのない地域Ⅱグループの土地では、救済が宗教関係者や高僧になったり、在地の有名寺院が話に取り込まれたりする。そして浄土真宗の希薄なⅢグループの地域では、蓮如上人や吉崎、嫁いじめも欠落し、信仰を邪魔するものが戒められるパターンの「嫁いじめ」の話に重点が置かれて語られる。「嫁いじめ」の話と蓮如伝説は融合することがなく、寺参りそのものへのなじみが薄く、単に「嫁いじめ」の話だけが伝わったとも考えられる。

おわりに

「肉附き面」の昔話を「寺参り型」、「蓮如救済型A」、「寺参り・嫁いじめ型」、「蓮如救済型B」の四つに分類し、そのどれにもあてはまらない「嫁いじめ」のみの話を「嫁いじめ型」、他に「由緒面型」「姑(継子)いじめ型」に分類した。そして、蓮如忌が盛んで、「蓮如上人絵伝」が多く伝わる地域をⅠグループ、浄土真宗の信者が多い地域をⅡグループ、それ以外の地域をⅢグループにわけ、話型の分布や偏差について考えた。その結果、「蓮如救済型A」は、Ⅰの地域にしか見られず、Ⅱ、Ⅲと地域が変化するに従って「寺参り・嫁いじめ型」の割合が増え、さらには寺参りをとらない「嫁いじめ」に特化した話が見られるようになった。「蓮如救済型A」、「蓮如救済型B」が、Ⅰグループに集中し、Ⅱ、Ⅲグループではほとんど見られなかったことから、「寺参りの好きな嫁」、「寺参りを嫌う姑」という設定は、この話を受け入れる地域にしか拡がらなかったと考えられる。

このような話型の分布から、「肉附き面」の昔話を考えると、「嫁いじめ」の話が「寺参り」の話に先行しているように思われる。秋田県の2、姑が口をきいてくれないので、何とかしてほしいと阿弥陀様に祈る嫁、埼玉県の64、嫁をいびるために仕事をたくさんさせ

た上、夜に使いをさせて脅す姑、岡山県の70の嫁を実家に帰りたいから、姑が毎晩面をかぶって脅す話、このような「嫁いじめ」の話の方が嫁姑の生活の実情には近かったと推測する。

これまでの「肉付き面」の研究は、「はじめに」の先行研究の紹介で述べたように、中世、近世の作品等に登場する「肉付き面モチーフ」の文芸的趣向や、蓮如、浄土真宗の唱導や信仰との関係を指摘することが多かった。この話が口承文芸として庶民世界でどのように受容されてきたの点については問題にされることがなかった。

本稿では、説教や伝説的な蓮如の「肉付き面」の話を踏まえながら、「肉付き面」の昔話の事例をもとに分析し具体的に考察してきた。その結果、蓮如伝説や説教では見られなかった「嫁いじめ」のモチーフが広く分布することが確認できた。信仰や宗教的立場に立つ話よりも、嫁いじめの方が切実な問題として昔話では話題になっていた。これはとりもなおさず、農村の庶民の日常生活における嫁姑といった世代間の葛藤が、リアリティーある話題として昔話に反映したものと受けとめられる。潜在的な嫁姑の葛藤が「肉付き面」の昔話を形成し、それが蓮如の「嫁威し」縁起に取り込まれたのではないかという見通しを論じたが、説得力のある説明までにはいたらなかった。今後は農村における家族意識の問題を踏まえさらなる研究をしていきたい。

注

(注1) 杉原丈夫編『越前若狭の伝説』(昭和四十五年二月二十五日) 二二七頁から二二〇頁参照。

(注2) 藤島秀隆「吉崎の嫁おどし(肉附面)の伝承―蓮如伝説の一断面―」(『金沢大学語学文学研究(18)』十九頁に(一)(二)に系統が分かれることが指摘される。藤島のこの論考において、「肉附面」伝説は「殊に、僧侶の説教が本話の伝承・伝播に大きな影響を与えている。それも報恩講の時に説教僧から聞いたという場合が非常に多い。」と述べている。

(注3) 美濃部重克「室町物語の挿絵小考」(『南山大学国文論集』第3号、一九七八・十二)、三二―三三頁、沢井耐三「お伽草子『磯崎』考―お伽草子と説経の世界―」(『古典の変容と新生』昭五九、明治書院) 三二〇頁参照。

(注4) 徳江元正「兄学生の母と大野木殿の子」(『能面 大野出目家とその周辺』、平成元年、大野市・大野市教育委員会編) 参照。

(注5) 南方熊楠、中瀬喜陽『門弟への手紙―上松翁へ―』(日本エディタースクール出版部、一九九〇・二)、三七〇―三七一頁参照。

(注6) 稲田浩二、小沢俊夫『日本昔話通観』、2、15、24巻による。

(注7) 蒲池勢至「蓮如伝承の生成と門徒の信仰」(『真宗民俗史論』二〇一三・三、法蔵館)

(注8) 地域のグループ分けは、蒲池氏の引用箇所論述と共に、小田匡保「日本における仏教諸宗派の分布―仏教地域区分図作成の試み―」(『駒沢地理

No. 39・二〇〇三』の四三頁の表3「都道府県別・宗グループ別寺院数(昭和34年)」を参考にした。浄土系でまとめらるが、Iグループに分けた新潟が四七・八%、富山、七六・三%、福井、五九・二パーセント、愛知、四八・九%、岐阜、五三・二%、というように、ほぼ五十%かそれ以上の割合を示している。IIグループは、滋賀、六八・八%、大阪、六六・七%、京都、四四・六%、安芸門徒の呼称がある広島、六〇・一%、島根県、四五・八%、香川、五十一・七%で半数を超える地域が多い。第三グループは、秋田、三〇・一、岩手、二〇・二、宮城、十七・二、山形、二一・九、東京二五・五、神奈川、二六・五、静岡、一〇・三、群馬、一〇・一、埼玉、八・六、長野、二八・八、岡山、一〇・五、徳島、十五・一、佐賀三六・三となっている。

(注9) 女性の労働に関しては、菅野則子「農村女性の労働の生活」(『村と改革』一九九二・十二、三省堂)、「近世女性の農村労働における位置」(『女性の暮らしと労働』平十・三、吉川弘文館)に詳しいが、向山雅重「主婦の座」(『信濃』第六卷九号、信濃郷土研究会)に次のように表される。「主婦の責任は食物の調製、食事の管理ばかりでなく、衣・食・住といふことばそのままに、家事一切をやつていかななくてはならない。藤や麻や木綿を手紡・手染・手織・手縫をして、家の者皆に、お正月のオソブツ、盆のカタビラ、春秋のアワセモノ、それに五月と秋のシゴト着など着せてゆかなければならぬ、それに洗濯一切をやつていくなど、苦労は並大抵なものではない。そのためのヨウナビ(夜業)は、春ヨウナビ・秋ヨウナビ、それに冬ヨウナビと、ほとんど一念の大半を夜業までつとめなければならなかった。」

(注10) 『石山後日 れんげ上人』(沙加戸弘『真宗関係浄瑠璃展開史序説―素材の時代』(法蔵館、二〇〇八) 伝説化された蓮如像を浄瑠璃で表現している。

(注11) 野村敬子「女性のフォークロア(五)―嫁姑・不幸なる話柄―」(『女性と昔話』二〇一七・三)

(注12) 籠谷真知子『真宗文化史の研究』(平成七・二、京都女子大学刊)

(注13) 國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 九』(七八頁)

〔注14〕 静岡県女子師範学校郷土研究会『静岡伝説昔話集』（静岡谷島屋書店、昭和9・3）

〔注15〕 天野武「ハンガカの習俗」（『加能民俗研究23』平成四・一、加能民俗の会）では「石川県七尾市鵜浦町川尻」の例として「嫁入り後、約十年間は、嫁入り先の蔵へ入ることは許されず、たとえ嫁入り道具を持参してきた場合でもそれを蔵に置いて保管することはできなかった。従って、嫁は蔵へ出入りする必要がなかったといわれている。」（五頁）とある。姑からのハンガイワタシ（主婦権の譲渡）がない限り、決まった時期に里帰りをしなければならなかった。瀬川清子「主婦権」（『婚姻覚書』一九九一・二、株式会社クレス出版）、「長野県には嫁住三年、静岡県下には嫁住二十年という言葉がある。（略）近世の嫁娶時代になると、若い嫁が婚姻と同時に、夫の家に引移りをして、姑のあてがい扶持で、三年、五年、二十年の間部屋住みをするのであるから、次代の主婦、主婦の候補者にとっては、なかなかつらく待遠なもの」（一八二）とある。

〔注16〕 千代田役場『千代田町史 民俗篇』（平成十二・七）ホボロは、広島の方言で野菜などを入れる籠のこと。

表 A. 昔話

No.	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫁の反応		面をはずす者	面の場所	話型	出典
01	秋田県仙北郡	嫁と姑	寺参りするのをやめさせた	ちゃんとして仕事をする、赤ん坊を寝かせる	鬼の面を被り、「白い着物きて、鎌を振り上げる	食らわば食らえ、なんまいだ	姑にいった面を嫁が念仏をあげて、寺に経をあげて、取る。姑もいい姑になる	嫁	×	(エ)	國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 121
02	秋田県かほ市 象潟町	嫁と姑	嫁が口をきかない姑に口をきいてほしいと水垢離をとり、観音様に拜むのを見ていじわるをする		観音様の後ろに隠れて、拜みに来た嫁を鬼面で脅す		姑にいった面を、嫁が水垢離をとり、観音様にお願いと取れる	嫁	×	(オ)	國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 111
03	岩手県南地方	嫁と姑	嫁が寺参りに誘われる。姑は、何か仕事をしたほうがいいと言う		邪面を被り、「嫁こよく聞け、寺参りに行く日があらば、芋で水くめ、裸でバツしよえ」		お寺に行って和尚様に取ってもらう	和尚様	×	(ウ)	國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 61
04	宮城県大崎市 古川松崎	嫁と姑	嫁が縁を覚えて、寺に置いて行く	夜寒に赤ねぎをさせられる	夜叉面を被って待ち構える		嫁がはかすと取れる	嫁	三本木の寺	(ウ)	佐々木健夫『陸前の昔話』
05	宮城県栗原市 若柳町	嫁と姑	なんぼいびつても口答えないので尚更頼にさわる		鬼の面を被ってとび出した	ありがたし、ありがたし	嫁が「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱える	嫁	×	(ウ)	上に同じ
06	宮城県仙台市 太白区秋保町 境野	嫁と姑	嫁いびり	毎晩墓参りをさせる	毎晩鬼の面で脅す		女の悲鳴が聞こえるので、住職が鬼を押しさえつける、老婆から無理やり鬼面を外す	住職	×	(オ)	上に同じ
07	山形県酒田高砂町能登興野	嫁と姑	姑が嫁の寺参りをやめさせたい		鬼面を被り竹藪に隠れて脅す	なんまんだ、なんまんだ	面がくつついてしまった	×	×	(ア)	野村純一『酒田の昔話』
08	新潟県佐渡	嫁と姑	姑がどんなに働かせても嫁はやりとけてお参りに行くので憎い	昼間は昼の勤め、夜には、粉を五升すらせ、一斗に増やした	鬼の面を被り、竹藪に隠れて脅かす		面が取れなくなり、嫁に後悔していると話すと、嫁は神さんにお参りし、帰ってきて面を外す	嫁	×	(ウ)	日本昔話記録 5『新潟県佐渡昔話集』
09	新潟県東蒲原郡肥前町	嫁と姑	姑が嫁のお寺参りをやめさせたい	嫁と姑が毎晩一緒に芋を煮る	鬼の面を被って脅す	飲まば飲め、食らわばくらえ	面が取れなくなったので、嫁が寺で和尚にお願いし、お経を読んでもらうと、取れる	和尚様	×	(ウ)	國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸 131
10	新潟県	嫁と姑	姑は嫁がおしゃやという説話を聞きに行くのをやめさせたい	夜なべ	鬼の面を被って脅かす	のめばのめ、かめばかめ、金剛の願いには、歯が立たぬ	嫁と姑が一緒に寺へ行き、おしようさまがお経を読んで、取れた	おしようさま	×	(ウ)	永沢謙一『赤い聞耳さん』
11	新潟県柏崎市 折居北向	嫁と姑	嫁が姑のお参りをやめさせたい		白い唾子を着て、長い髪をして、鬼の面を被って脅す		一週間、おばあさんとお参りをすると面が取れた	占者のすめでお語り	×	(キ)	真鍋真理子『越後黒姫の昔話』
12	新潟県	嫁と姑	姑が嫁を憎む		夜分に、鬼面で脅す	恐ろしいと言って倒れる	嫁に誘って、一緒にお参りをさせてくれと言うと、取れる	古い師、みこ		(ア)	岩瀬博『替女の語の昔話』
13	新潟県巻町	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		毎晩、鬼の面を被り、竹藪のところに		嫁が姑を吉崎の寺へ連れていくと取れる	お寺様	吉崎	(ア)	新潟県巻町双書『犬に吞まれた嫁』

No.	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫁の反応		面をはずす者	面の場所	話型	出典
14	新潟県	嫁と姑	嫁が寺参りに行くのをやめさせたい		ある晩、鬼の面を被って脅す	かまばかめ、のまばのめ、金剛信心に歯が立たん	嫁が、ナンテンタマ、ナンテンタマと言て取った	嫁	×	(ア)	水澤謙一「替女のごめんなんしよ昔」
15	新潟県柏崎市	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		鬼の面を被り白無垢の着物をきて、長い髪になって、幽霊の真似をした	おっかなからん	古い師のところで、神さんのお告げをもらって、巫女に祝詞をあげてもらった	古い師、巫女	×	(ア)	久我勇「鶴川の民話」
16	新潟県三島郡越路町	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい	仕事に糸をとる。夜なべ仕事もする	嫁が寺参りから帰る道中、鬼の面を被って、脅かす	ちっともたまげないで、なんまいだなんまいだと言て行ってしまう	嫁が姑に念仏を真剣に唱えさせると、面が取れた	嫁	×	(ウ)	越路町民話「ムジナととつろあー高橋ハナ吉話集」
17	新潟県北蒲原郡豊浦町	嫁と姑	嫁の寺参りがうらやましく、やめさせたい		鬼の面を被って、嫁を脅す	嫁は驚いて、寺へ駆け込む	和尚様がありがたいお経をあげて、すこしずつ取る	和尚様	×	(ア)	佐久間淳一編「波多野ヨスミ吉話集」
18	富山県東礪波郡上平村	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい	参る暇がないくらい仕事を与える	竹藪の中で、鬼の面を被って鎌を持って脅す	殺したけりや殺してもいい、こうぼうの信念には歯がたたん	連如上人に会って、南無阿弥陀仏と言わないうちに「南」といったら面がむけた	連如	×	(エ)	國學院大學民俗文学会「伝承文芸15」
19	富山県東礪波郡上平村	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい	いりこを挽かせる	竹藪で鬼面を被って脅す	飲みたければ飲め、食いたければ、食え。	吉崎へ行って面を取ってもらう	吉崎	×	(エ)	國學院大學民俗文学会「伝承文芸15」
20	富山県東礪波郡上平村	息子よそじ、姑、嫁	嫁の吉崎に説教を聞きに行くと、下駄がへるし、仕事の間違になる)	百姓の仕事、お米や雑穀を挽く仕事	般若の面をきて、白い着物を着て、鎌を持って、山道に隠れていた	金剛信心、歯を立ててみよ	連如のところへ行って、取ってもらおう	連如	寺	(エ)	
21	石川県珠洲市	嫁と姑	嫁の連如さんのところへお参りに行くのが憎い	夜なべ	嫁がお参りから帰る道で、鬼の面を付けて待っていた	食はれば食めよ、飲まればつまいが	吉崎へ行き、連如さまのところにお参りして取れる	連如	×	(エ)	國學院大學民俗文学会「伝承文芸8」
22	石川県小松市大崎町	嫁と姑	お寺参りにやりたくない	麦ほり、いりこ	竹藪で隠れて面を被っている	金剛の信心のためにやね、恐ろしくもない	お寺に参って取ってもらおう	寺	吉崎	(エ)	京都女子大学説話研究会「小松市の市話」
23	石川県小松市下栗津町	嫁と姑	お寺参りにやりたくない	いりこを挽かせる。米を粉にする、はったいで脅す	えも坂で隠れて、鬼の面を被って脅す	何やも信心	吉崎へ行ってお坊さんに経をあげてもらって取ってもらう	吉崎のお坊さん	吉崎	(エ)	上に同じ
24	石川県小松市千代町	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい	嫁の連如参りをやめさせた	吉崎へ行く道のところで鬼面を被って待ち構える	なあもう、飲んだか飲まれ、喰んだか喰まれ	嫁のごは(御坊)さまのところへ連れて行って取れる	嫁	吉崎御坊	(ア)	上に同じ
25	石川県小松市那加町	嫁と姑	嫁の連如参りをやめさせた	い	面を被って、嫁に呼びかける	飲めば飲め、喰めば喰め、金剛の信心な喰まれまい	吉崎のごは(御坊)さまのところへ連れて行って取れる	ばさま	吉崎	(エ)	上に同じ
26	石川県小松市波佐谷町	嫁と姑	嫁が連如の説教を聞きに行くのをやめさせたい	挽くものを抱いて、団子にもする	面を被り、鎌を持って、藪の中に隠れる	喰めば喰め、金剛の信心な、喰めもせで、なんで喰まれもせんやろ	嫁が婆を寺へ連れて行って、経をあげる	寺	×	(ア)	上に同じ
27	石川県小松市若松町	嫁と姑	嫁がお参りに行くのをやめさせたい	豆や羽など、石の臼で挽く	藪の中で嫁の帰るのを待つ	食みたか呑めいし、喰みたか喰め、南無阿弥陀仏	連如を呼んで来て、面を取ってもらう	連如	吉崎	(エ)	三弥井書店「南加賀の昔話」
28	石川県加賀市山中町滝	嫁と姑	嫁が吉崎へいくのをやめさせたい		先祖伝来の鬼の面を蔵から出して来て、竹藪で待つ	南無阿弥陀仏					

No.	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫌の反応		面をはずす者	面の場所	話型	出典
29	福井県足羽郡 美山町	嫁と姑と 息子のよ そじろう	嫁の吉崎参りをやめさせた	糊をとったときのくず を白でひき、団子にす る	氏神の鬼面を披り、白無垢をき て脅す	はもはばはめ、かまはかめ、 よもや金剛の信心ははまれ もしようめえ	面も取れないし、足も動かないので、運 如のどこに行つて機嫌して面が取れる	運如	×	(エ) 國學院大學民 俗文学研究會 「伝承文芸9」	
30	福井県速岐郡 名田庄村中	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		嫁が帰る時間に恐ろしいさびし い場所待ち構えて、面を披つ て脅す	飲まば飲め、食らわば食ら え。金剛けんこの信心はき ばもたたな儲も立つまい	運如さんに取ってもらう	運如	×	(イ) 稲田浩二「若 狭の昔話」日 本の昔話1	
31	東京都大田区 瀬	嫁と姑	嫁姑の仲が悪く、姑が嫁を 脅そうとした、根性だして 嫁をいびる		面を披つて脅す		嫁をいびるから、面がぐいこみ、お経か 何かあげて取る	×	×	(オ) 「大田区の文化 財」22集 口承文芸	
32	東京都大田区 下丸子	嫁と姑	嫁が憎い姑		年中、夜になると面を披つて嫌 を持って出る	嫁は嫌を取つて切る	面を取つて切つたら姑だった、嫁にな ると大変だ	×	×	(オ) 上に同じ	
33	東京都大田区 古川	継子	継子をおどかさす親		面を披つて脅かす		面が取れなくなった、だから子供をいじ めてはならない	×	×	(キ) 継 子いじめ	
34	東京都大田区 馬込	お面を盗 んだ人	いい面を盗んでかぶる				面が取れなくなった、盗みをしてはいけ ない	×	×	(カ) 上に同じ	
35	東京都大田区 八幡塚	若い衆	神社のありがたい面をいた すらする				面が取れなくなり、神官に祈禱してもら う	神官	×	(カ) 上に同じ	
36	神奈川県藤沢 市石川	嫁と姑	姑が嫁の浮気を疑う	夜なべ	鬼の面を披り、竹藪で待つ	食えば食え、はげばはげ、 こではかれてでも、食われ ても、心は薄のミヨウドウ 院	姑が鬼の面を披つたから、嫁が取ろう と思つたら、お面の内側へ肉がくっつい てしまった	×	×	(ウ) 「藤沢の民話 第三集」	
37	静岡県浜名郡 芳川村	嫁と姑	姑が嫁の阿弥陀信仰を嫌つ ていた		お宮の出口の際に鬼の面を披り、 隠れていて、刀で斬りつけた	一時気絶したが、気を取り 戻し、家に帰った	嫁のかけていた布のみが右肩から切れ ていて、身体は何もなかった、代わりに 阿弥陀様の方が切られていた、姑が面を 取つてくれと嫁に懇願し、嫁が力任せに 外す、面は肉がついて取れる	×	×	(ウ) 静岡県女子師 範学校郷土研 究會「静岡県 伝説昔話集」	
38	愛知県西尾市 寺井町	嫁と姑	嫁が憎くてたまらない、嫁 の寺参りをやめさせたい		鬼の面のうを披つて竹藪で待つ	食わば食え、飲まば飲め、 金剛心はよう飲めまいが	嫁の勧めでもお坊さんのところへ行き、数 人上人縁により面が取れる	お坊さん	吉崎御坊	(エ) 三弥井郡西 三河の昔話	
39	愛知県西尾市 米津町	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		鬼の面を披つて脅す	食めば食め、食らわば食ら え、金剛の心、よもや儲も 立つまい	嫁の勧めでもお坊さんのところへ行き、数 人上人縁により面が取れる	上人縁	越後	(ア) 上に同じ	
40	愛知県西尾市 南中根町	嫁と姑	寺参りをやめさせたい		鬼の面を披つて脅す	食めば食め、食らわば食ら え、金剛の心、よもや儲も 立つまい	嫁の勧めでもお坊さんのところへ行き、数 人上人縁により面が取れる	お坊さん	吉崎御坊	(イ) 上に同じ	
41	愛知県西尾市 室町	嫁と姑	寺参りをやめさせたい	嫁の仕事を増やす	鬼の面を披つて脅す	食めば食め、食らわば食ら え、金剛の心、よもや儲も 立つまい	お寺へお参りすると面が取れる	×	×	(ウ) 上に同じ	

No.	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫁の反応		面をはずす者	面の場所	語型	出典
42	愛知県西尾市平原町	嫁と姑	寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと鬼面が取れる	お坊さん	吉崎御坊	(イ)	上に同じ
43	愛知県西尾市江原町	嫁と姑	寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	お坊さん	吉崎御坊	(イ)	上に同じ
44	愛知県西尾市吉良町上須賀	嫁と姑	寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅し、鎌で殺そうとする	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	お坊さん	吉崎御坊	(イ)	上に同じ
45	愛知県西尾市吉良町上須賀	嫁と姑	嫁の寺参りを淨氣と勘違いする		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	お坊さん	吉崎御坊	(ウ)	上に同じ
46	愛知県西尾市吉良町鯉馬	嫁と姑	姑の寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	お坊さん	越後	(イ)	上に同じ
47	愛知県西尾市吉良町鯉馬	嫁と姑	姑の寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	御坊さん	吉崎御坊	(イ)	上に同じ
48	愛知県西尾市吉良町富田	嫁と姑	姑の寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	お坊さん	吉崎御坊	(イ)	上に同じ
49	愛知県西尾市吉良町小山田	嫁と姑	姑の寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食めば食め、食らわば食らえ、金剛の心、よもや揃も立つまい	嫁の勤めでお坊さんのところへ行き、数珠で撫でてもらうと取れる	御坊さん	吉崎御坊	(イ)	上に同じ
50	愛知県額田町明見	面打ちのお爺さん、おばあさんと嫁	お爺さんは面打ちに忙しく、息子は嫁にとられて憎い、おばあ様に納める立派な面を使って嫁を脅かしたい		おじいさんが打った腹縁におさめる立派な面で脅す		お寺の和尚様のところへ行くが、本人は南無阿弥陀仏がから言えない、仏になれない、そのために、全員で体をつかみ、面を持ち、和尚さんが拜んで、ようやく肉がついたまま外れる、おばあさんは人水自殺する	和尚さんだ腹縁のところ	(カ) + (ウ)		上に同じ
51	愛知県岡崎市大井町	嫁と姑	寺参りをする嫁をやめさせたい		鬼の面を被って脅かす		嫁が行く寺の僧に読経を頼むと取れる	寺の僧	×	(ア)	上に同じ
52	愛知県岡崎市東蔵前町	嫁と姑	越後吉崎に嫁が毎晩参詣に行くのをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	食えば食え、どうしても、わしは信心のお念仏を頂いておるからどうしてくれるといいから	連如上人に救いを求めて、嫁が姑を連れていく	連如	越後吉崎	(イ)	上に同じ
53	愛知県額田市宮崎	嫁と姑	嫁が親鸞の話を聞きに行くのをやめさせたい		鬼の面を被って脅す		嫁が南無阿弥陀仏と唱えると面が取れる	嫁	×	(ア)	上に同じ
54	岐阜県郡上郡下瀬村	嫁おきよと姑とヤッソ	寺参りの暇が惜しいので、嫁の寺詣でをやめさせたい		お宮の鬼の面を被って脅す		ヤッソが姑を連如のところへ連れていく、連如は姑に念仏を唱えさせて、面をひっぱって取る	連如	×	(イ) (二十四拜)	東洋大学民俗研究会『和良の民俗』

No	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫁の反応		面をはずす者	面の場所	話型	出典
55	岐阜県吉城郡宮川村	嫁と姑	お寺参りをやめさせたい		鬼の面を被って脅す	信心厚く、おびえなかった	嫁と姑で一生懸命寺参りして、私の力で面を外した	嫁	越前の寺	(ア)	國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸71』
56	岐阜県大野郡丹生川村	信仰深い嫁と残酷な婆さん	仕事が終わって寺参りにいけの好き		掃り道に脅かして、驚かなかつたので、仏壇の前から脅かす	あなたに止められても、私は阿彌陀様に感謝して、お寺に参ると言う	面が取れなくなり、嫁は姑を連れて寺和尚のところに行き、紐をあげてもらう	寺の和尚		(ア)	上に同じ
57	岐阜県山県郡高宮町	二人のお寺参りを疑う姑	二人のお寺参りを疑う		鬼の面を被って脅す	他力の信心食われまい	お坊さまか、おしうさまに頼み、御所様してもらう	おしうさま	吉崎御坊	(エ)	岩崎美術所『恵那昔話集』
58	岐阜県恵那郡山岡町田沢	親孝行の息子と嫁さん	夫婦仲の良いのが気に入らない、嫁をいびる		鬼の面を被って鎌を持って嫁を殺しにいけ	嫁は気絶をしただけで、傷がなかった、日進さまが助けてくれた	お寺のお上人様をお願いをすると拜んでお寺のお上人さま	お寺のお上人さま	×	(ウ)	
59	岐阜県大野郡庄川村猿丸	嫁と姑と息子	お寺参りをやめさせたい		八幡様の面を借りてきて、笹藪から脅かす	食えば食え、はめばはめ	見てもらう人に見てもらったら、「千人の人に聞かぬ取れんよ」と言われて、毎日、都に大八車に乗せて、千人の人に見てもらったら、千人目の時に、ボンと面が外れた	毎日千人の人に聞かぬ取れんよ	吉崎	(イ)	「岐阜県大野郡庄川村の民話」
60	岐阜県大野郡庄川村寺河戸	嫁と姑	毎日の寺参りをやめさせた		竹藪から鬼面を被ってとび出し	食わば食え、飲むば飲め	お寺へ一生懸命お参りすると面が取れる	×	×	(ア)	上に同じ
61	岐阜県大野郡庄川村野々良	嫁と姑	寺参りをやめさせたい		山に隠れていて、面を被って脅す	食わば食え、はめばはめ、金剛の信はよもやはむまい	お寺さんに取ってもらう	お寺さん	×	(ア)	上に同じ
62	岐阜県郡上郡大瀬村牧	嫁と姑	寺参りをやめさせたい		鬼面を被り、鎌を持って道の途中にある竹藪に隠れる	食わば食え、はめばはめ、金剛の信はよもやはむまい	吉崎へ連れて行って、お寺様でおばあさんが御機嫌し、お念仏すると、面は取れた	吉崎で念仏	吉崎	(エ)	日本の昔話6「美濃の昔話」
63	岐阜県上野村橋飯橋沢	嫁と姑	お寺の和尚と浮気を疑う		般若の面を被って取れなくなる	取って食うなら食ってくれ、殺すなら殺してくれ	とんととこずけの面をして、皮がベタリと取れる	×	小さなお堂	(イ)	國學院大學民俗文学研究会『伝承文芸19』
64	岐阜県萩文郡大瀬村中津川	嫁と姑		米や麦を、臼挽きさせて一晩中寝させないようにする、どんどん増やすが全部やりとげる	嫁を夜におつかいに行かせて掃	取って食うなら食ってくれ、殺すなら殺してくれ	何とくして取れたのだろう	×	×	(オ)	上に同じ
65	長野県北安曇郡北城村切久保部落	お経という嫁と姑	いじめられるので、姑を懲らしめたい		姑の寝室で障子の破れ目から脅かす		面が取れないままで、おかるは杓子盾へ登った	×	×	(キ)	「日本民俗学大系 中部II」
66	長野県北安曇郡北城村切久保部落	嫁のおか	嫁が姑を脅かそうと氏神の宝物の面を盗む		白装束になって顔を乱して、鬼の面を被る	もうどこいかと連れて行くのなら行て、殺すなと殺してくれ	嫁がなんまんだぶつと言うと、すぐに取れた	×	×	(ア)	日本の昔話6、笠井典子「近江の昔話」
67	滋賀県蒲生郡竜土町川寺	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい								

No.	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫌の反応	面をはずす者	面の場所	話型	出典
68	大阪市北区天神橋筋	嫌と姑	嫌の寺参りをやめさせたい		里帰りさせて、その帰ってくる時に、面を被って脅かす		お嬢さん一生懸命念仏を唱えて取ってあげる	×	永平寺	(オ) 日本のお話で、桶田浩二「浪速のお話」
69	京都府与謝郡伊根町菅野	嫌と姑	賢い嫌を意地悪な姑がいじめ、嫌と寺のお坊さんの仲を疑う		お参りからの帰りに大門にいて、鬼の面を被り、脅す	お母さんな、そんなことしどおくれでも、吾はひとつも驚きませんで、吾はなあ、あなたの心持が直ってもらや良えが思っ	おしようさん	×	(ウ)	京都府総合資料館「丹後伊根のお話」
70	岡山県真庭市輝さん	嫌と姑	嫌が憎くてたまらない		嫌がトイレにいく時に、陰で隠れて驚かすことを繰り返す	嫌は「きやあ」と驚く	お寺のお坊さんが、姑を諭し、本当に心を入れかえて、嫌をかわいがるのであれば、御本尊様に頼んで、面が取れるようにしてやる	お坊さん	×	(オ) 立石憲利「真庭市の民話」
71	広島県安芸高田市八千代町下土師	嫌と姑	法然上人は、迷わず悪人なので、嫌がそこに通うのをやめさせたい	昼の仕事が忙しいので、夜眠をみて、さみしいところへ参る	鬼の面を被り、白い着物をきて、敷に隠れて脅かす	食えば食え、裂かば裂け、心は弥陀の浄土に住みあそぶ	お寺の上人さんが縁を上げて、おばあさんも拜んで、お嬢さんも拜んで、面が取れる	お上人	×	(ウ) 大谷女子大学説話研究会「八千代の昔話」
72	広島県安芸高田市八千代町下佐々井	嫌と姑	お姑さんが寺参りがきらい	夜なべの仕事	面を被り、かやばらみたいなのを掛けて隠れていた		共に念仏を唱えて、仏のことを慕はせる	×	いまだに記念に置いている	(ウ) 上に同じ
73	広島県安芸高田市八千代町勝田	嫌と姑	姑の目をぬすんで説教を聞きに行くのをやめさせたい		鬼の面を被って道端で待つていた		嫌は姑を連れてお寺へいき、お寺で説教を聞いた。和尚さんが面を取ると、取れた	おしようさん	×	(ア) 上に同じ
74	広島県安芸高田市八千代町勝田	嫌と姑	嫌がお寺参りをよくするので、仕事にならないので、参らないようにさせたい		鬼の面を被り、嫌の前へ立ち差がる	はまば、かめ、食らば食え、嫌や信心の真は神はよし面白い	常陸の国の寺へ参り、和尚さんにわけを話すと、心を入れ替えることを約束して、嫌と同じように寺へ参り、仏さんの話を聞くと言うのと、面が取れる	おしようさん	常陸の国のお寺、今でも残っている	(ア) 上に同じ
75	広島県安芸高田市八千代町下根下	嫌と姑	嫌が浄土真宗のお寺へ参るのを楽しみにしているので、それをさせまいと姑が思う		鬼の面を被り、敷の中から飛び出す	別に恐ろしくもなかった	お坊さんに自分の悪かった行為に対して、抵罪をしてもらい、神をつもうとする人の邪魔をしたことに気づき、懺悔したら面が取れる	お坊さん	×	(ア) 上に同じ
76	広島県安芸高田市八千代町勝田	嫌と姑	いつも嫌が寺参りにでていくのが気に入らない		鬼の面を被り、竹敷の中に隠れていた	南無阿弥陀仏を唱えて通りぬける	お寺へいき、南無阿弥陀仏の力によって面を取る	寺の阿弥陀仏の力		(ア) 上に同じ
77	広島県安芸高田市向山	嫌と姑	嫌が法話を聞きに寺へ行くのをやめさせたい	(おなど)を驚く	面を被り、暗闇から出て脅した		嫌が姑を連れて寺へ行く、話を聞いて姑が改心し、面が取れる、姑は信心深くなる	姑の改心	×	(ウ) 上に同じ
78	広島県安芸高田市佐々井	嫌と姑	嫌の寺参りが憎い	仕事をいっぱい言いつけて、寺に行けないようにするが、終わらせて行く	敷に隠れて面を被って脅かす	ひとつも恐れないで、念仏を唱えて帰る	嫌が姑に念仏を唱えさせて取れる	嫌	×	(ウ) 上に同じ

No	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫁の反応		面をはずす者	面の場所	話型	出典
79	広島県安芸高田中佐々井	嫁と姑	姑は仏さんのことが嫌		寺参りから帰るのを待ち受けて、鬼の面を被いて待ち伏せしていた	念仏三昧で戻ってきて、全然恐れない	嫁がどこかへ連れて行って面が脱げる	嫁がどこかへ連れていく	信濃の善光寺	(ア)	上に同じ
80	広島県安芸高田勝田	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		竹藪の中に居んで鬼の面をかぶり、脅かす		面が外れなくなつて、嫁さんに嘲った。仲良くならつた	×	×	(ア)	上に同じ
81	広島県安芸高田下根下	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		嫁さんの参る道端へ隠れて、鬼面を被って出た	信仰の強い者なので恐れない	面が外れなくなつた	×	×	(ア)	上に同じ
82	広島県安芸高田上佐々井	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせたい		鬼面を被って、鬼に化けて嫁を脅す		鬼面が取れなくなり、お寺でお説教を聞いて、その間に鬼面が取れた。仲良く寺参りをする	×	×	(ア)	上に同じ
83	広島県高田中上根	嫁と姑	親鸞聖人に帰依した嫁の形骸をする		鬼面を被って、脅す		親鸞聖人が念仏を唱えて面がようやく取れる	×	×	(ア)	上に同じ
84	広島県安芸高田中佐々井	後家の嫁と姑	蓮華上人の説教を聞きにく嫁の浮気を疑う		鬼面を被って脅す		嫁が姑を連れてお寺へ参り、説教を聞いたら、脱げた	蓮華上人の説教	×	(ア) 浄瑠璃「蓮華上人」	上に同じ
85	広島県安芸高田半原	嫁と姑	嫁の寺参りが妬ましい		鬼面を被って脅す	嫁はたまげた	姑の顔から面が脱げなくなつた	×	×	(ア)	上に同じ
86	広島県安芸高田勝田	嫁と姑	嫁の寺参りが妬ましい		鬼面を被って脅す		面が顔から離れなくなり臆怖した	×	×	(ア)	上に同じ
87	広島県安芸高田上根	嫁と姑	嫁の寺参りを邪魔する		鬼面を被って脅す	食はば食え、飲めば飲め、この金圓の信は我あてにはあうまい	面は取れなくなつた	×	京都	(ア)	上に同じ
88	広島県江津市板江町	嫁と姑	嫁の寺参りをやめさせようとする		鬼面を買って、寺から嫁が帰るのを山の峠で待ち伏せする	鬼腹存めば存め、嘲めば嘲め、他力の信心、よう嘲むまい	嫁さんが、ばあさんを連れて寺に参って坊さんにお経を讀んでもらつて、放してもらった	お坊さん	×	(ア)	全国昔話資料集成26「石見昔話集」
89	広島県益田市	嫁と姑	嫁の寺参りを浮気と疑う	毎晩毎晩ひのじょうの仕事を	鬼面を被り、竹藪からでて脅す	かめばかめ、くらはばくらは、金圓の心、鬼には剛はたつまい	面が脱げなくなつた	×	吉崎の別院	(エ)	広島県益田市民話集
90	広島県飯石郡掛合町波多	嫁と姑	嫁と仲が悪いので脅かしたい		面を被って脅かした		お寺の和尚さんが、心を入れ替えるなら、拜んで取ると言い、和尚さんに取つてもらつた	おしようさん	×	(ウ)	広島大学国語教育研究室「広島県飯石郡掛合波多昔話集」
91	広島県飯石郡掛合町波多米町	嫁と姑	寺参りする嫁が気に入らない		竹藪の中に入り、鬼面をかぶつて脅す	全く驚かない	姑の顔に面がついて離れない	×	×	(ア)	上に同じ

No.	地名	人物	理由	仕事	脅かし方	嫁の反応		面をはずす者	面の場所	話型	出典
92	鳥取県綾川郡 湖陵町差海・川前	嫁と姑	嫁を実家に帰らせたい		夜な夜な面を被って出る		面を取ってみると枯だった	嫁の知恵	×	(ウ) 仏壇の内敷のいわれ	鳥取大学国語教育研究室「鳥取県綾川郡湖陵町民話集」
93	徳島県三好市 池田町漆川梅の谷	嫁と姑	嫁をいじめる	夜なべ	般若の面をかぶり、竹藪で皆んでいた	気を失う	姑が瀧り、嫁は母親の性を直してほしいと寺参りしていたことを明かす。住職さんに頼んで、お折りしてもらい面を取る	おじゅっさん お寺	どこかの	(ウ)	市原麟一郎「阿波・池田の民話」
94	香川県高松市 南山	嫁と姑	姑が嫁の寺参りを嫌がる	五升五斗の麦を全部粉に挽かせる	鬼の面を被って、脅す	嫁が姑であることを知り、「そんなにまでせんであろうしいではありませんか」	嫁は姑を連れてお寺へ行き、住持さんに拝んでもらって取れた	住持さん	×	(ウ)	『タムに沈む村 香川県高松市町南山地区民俗誌』
95	香川県高松市 香川町浅野	嫁と姑	姑が嫁の寺参りが憎い	おそば三升挽いて、おちらしを四升挽く	家にある般若の面を被り、竹藪に隠れて脅かす	のめばのめ、囁めば囁め、金剛神にはぶは立つまい	面が取れなかった	×	×	(ウ)	博信「母から子への手紙」
96	佐賀県神埼町	嫁と姑	姑が嫁の寺参りを邪魔する		面を被って脅す	ひとつも恐れないで、南無阿彌陀仏を唱える	面が取れなくなった、それから寺参りをするようになった	×	×	(ア)	神崎町史編集委員会「神崎町史」
97	佐賀県川副町 船津	嫁と姑	姑は嫁の寺参りが嫌い		竹藪から面をかぶって顔を出す		懐怖すると肉が閉いて取れた	×	×	(ア)	川福岡志編纂委員会「川副の口承文芸」
98	佐賀県川副町 野村	嫁と姑	姑が嫁の寺参りを好かない		面を被って脅かす	びっくり騒がない、	面が外れないので、親鸞上人を連れてきて、お経を上げてもらって外す	親鸞上人	×	(ア)	上に同じ
99	佐賀県川副町 下小路	嫁と姑	姑が嫁をいじめる	木綿を挽かせる	見面を被って脅かす	お慈悲の身なればのみにゆるまい上にもゆるまい	三井寺に一緒にお参りして、嫁がお願ひする	嫁 井寺		(ウ)	上に同じ